セクシュアリティー、ジェンダーと女の友情
——Toni Morrison の *Sula*（1973）

渡　部　知　美

Toni Morrison は、Claudia Tate とのインタビューにおいて、第二作目の作品 *Sula*（1973）のテーマは、「善悪」と「友情」であると語り、更に後者について次のように語っている。

> Friendship between women is special, different, and has never been depicted as the major focus of a novel before *Sula*. Nobody ever talked about friendship between women unless it was homosexual, and there is no homosexuality in *Sula*. Relationships between women were always written about as though there were subordinate to some other roles they're playing, this is not true of men, it seemed to me that black women have friends in the old-fashioned sense of the word; perhaps this isn't true just for black people, but it seemed so to me. I was half-way through the book before I realized that friendship in literary terms is a rather contemporary idea.（Tate 157）

Morrison が、女同士の友情は、家父長制社会においては異性愛に道を譲らざるを得なかったものであり、文学作品のテーマとしては現代的なものであると悟っていったのが分る。

本作品の語り手は、Ohio 州の架空の町 Medallion 市の黒人居住区ボトム（"the Bottom"〔3〕）の住民の一人で、Sula Mae Peace や Nel Wright と同世代の黒人女性であり、全知の視点から語っている。1910年代後半から20年代前半にかけて少女時代を過ごす二人の黒人の女の子の視線の高さまで降り、社会的ヒエラルキーの最下位に位置する黒人少女の気持ちをよく捉えている。また、白人は谷間に、黒人は岡に住むという、まるで白人と黒人の地位が逆転したかのような世界が誕生するに至ったいきさつ、即ち、ボトムの起源に書き込まれた "nigger joke"（4）と、黒人共同体としての崩壊後のボトムを不完全ながら枠組みとして使うだけでなく、ボトムの "real place"（166）と言えるくらいの実在感、賑わいの感覚を伝えており、過去からずっと住民の中で息づいている黒人

としての感情を、語り手はよく分っていると考えられる。

本論においては、ボトムの住民がアフリカの先祖から受け継いだ考え方を考慮に入れながら、主に Sula と Nel に焦点を当てて、黒人女としてのセクシュアリティ、ジェンダーと、女同士の友情という三つの問題の関わりを考察する。

I

Nel Wright は、New Orleans に住んでいるクリオールの祖母 Rochelle Sabat、そして、母 Helene Wright の血を引いて、肌は “the color of wet sandpaper”（52）であるが、彼女の “broad flat nose”（18）と厚い唇は父親の Wiley Wright 譲りである。Nel は白人と黒人との混血児の容貌なのである。一方、Sula Peace は、“heavy brown”（52）の肌であり純血の黒人であるが、一方の目のまぶたには生まれつきあざがある。そのあざは、“a stemmed rose”（52）のような形をしているが、見る人によっては異なる形に見えるのであり、それがなければ平凡な顔にあやしげな刺激が生まれている。それは年齢を重ねるにつれ濃くなっていく。変幻自在性を帯びているかのようなそのあざは、Sula の女としての、一人の人間としての変貌を予示しているかのようである。Nel は、船のコックをしている父親が不在がちの家庭で、母親 Heleneの躾により従順で礼儀正しい少女に育っている。一方、Sula は、祖母 Eva や、夫を亡くした母親 Hannah の元へ、彼女達を崇拝する男達が毎日のように出入りする環境で育っている。自分の子供達を生き延びさせるために自身の片足と引き換えに大金を得た Eva の家庭内での権力は、専横的とさえ映る。Nel と Sula は、中流の核家族と下流の大家族という違いはあれ、母権制的家庭で育ったという点では共通している。

人種的容貌の違い、階級差を越えて、Nel と Sula は互いに惹かれ、親友になっていく。[1] Helene は、祖母 Cecile Sabat によって、売春婦をしている母 Rochelle の “wild blood”（17）に注意するよう言い聞かされながら、四体の処女マリア像のある家で敬虔なカトリック教徒に育った。性的にみだらな血が表れないよう今一番恐れているのは、Helene 自身である。Nel は、病気の Cecile を見舞うため New Orleans 行きの列車に Helene に連れられて乗る。白人専用車両を通り抜けた時に、車掌から、“what you think you doin’, gal?”（20）[2]ととがめられ、彼に対し、まぶしいほど媚びるように Helene は微笑む。Nel は、それまで無関心だった二人の黒人兵士の眼に、傷つくと同時に、自分の母への憎

しみ、侮蔑の表情が浮んでいるのを感じ取っている。ベルベットのえりのついたウールの濃褐色のドレス、“a heavy but elegant dress”（19）の下から、女としての Helene のセクシュアリティが思わず出て来たのである。それは、「男への媚びであると共に白人への媚びであるという二重の媚びへつらい」（西山 16）であったがために、白人男性が起こした戦争のためにヨーロッパ戦線で戦った黒人兵士の侮蔑の対象となったのである。

Nel にとって、母は白人男性の前で一瞬にして “custard”（22）のようにとろけてしまったのであり、初めて、母の黒人女としての嫌らしい面に彼女は気づいたのである。鏡に映った自分を見ながら Nel が “I'm me. I'm not their daughter. I'm not Nel. I'm me. Me.”（28）と言うのは、母と同じ血が自分にも流れていることを意識するからである。自分は絶対に白人に、男に媚びたりしない、自分は母とは違うのだという Nel の自分自身に対する宣言と捉えられる。母の血の否定による “her new found me-ness”（29）が Nel に母に反抗する力を与え、Sulaと友達になる。そして、母の自身の美貌を武器にしての白人男性への媚びの目撃は、Nel にやがて黒人であるが故、女であるが故の生における限界を悟らせるのだと考えられる。

一方、Sula は、Eva が帰還兵である息子 Plum を手に掛けたことを知っている。また、Hannah が相手を変えては男と昼間の情事を楽しんでることを知っており、寝室で母が男と眠っている姿を目撃したことさえある。こういう家庭状況が彼女の心を荒れさせ、三分以上、一つの感情を持ち続けることのできない少女にしたのだと考えられる。従って、家族といても孤独感を抱かざるを得ないのであるが、Sula を Nel にぐっと引き寄せるのは、Hannah の “I just don't like her”（57）という言葉である。この時の Sula の気持ちを、J. Brooks Bouson は次のように解釈している。

> Hannah's words are inherently shaming, for a core experience of shame is the sudden exposure of one's basic unacceptability. Hannah's shaming pronouncement bewilders and motifies Sula, who becomes emotionally paralyzed and numbed.（Bouson 64）

自分は実の母親に自身の子供として受け入れられていないのだという思いから、Sula は恥辱感を覚え、心が凍りついてしまったかのような状態であると

思われる。彼女が意識した「目のなかの刺すような痛み」（“a sting in her eye”〔57〕）は、その恥辱感と悲痛なショックが原因であると考えられる。彼女が沈み込んでいた “dark thoughs”（57）から Sula を “bright, hot daylight”（57）の中へ連れ戻してくれたのが、Nel である。しかし、Sula は Nel をいじめるアイルランドからの移民の息子達に、石板もナイフも向けることができず、自身の指先をナイフで切ることで彼等を追い払うことしかできない。Sula も、白人でもなく、男でもないということは、生における “all freedom and triumph”（52）が自分には禁じられている、手に入らないことを意味しているということを悟っているのである。

従って、Nel と Sula は、互いが互いにとって “safe harbor”（55）なのである。互いに、相手の眼に自分が映っていることを感じることにより、自分が求めていた親愛の情を見い出し嬉しいのである。二人が互いに体を180度に、一直線にして草の上に横たわり額が触れ合いそうにしている様子、そして、二人のいる四本の木の葉が絡み合ってできた四隅のある涼しい木陰という空間は、二人だけの世界で、Nel と Sula がともに精神的安定感と安らぎを得ていることを物語っていると捉えられる。

しかし、横たわって穴掘りをした後、川の “swift dull water”（59）を見つめている二人の少女を捉えている “unspeakable restlessness and agitation”（59）は、二つの穴が一つにつながりながらも “grave”（59）と化したことが暗示しているように、女同士の友情のもろさの予示という意味合いを含んでいると考えられる（利根川 141-142）。不安定さを孕んだ二人だけの世界に、ぶかぶかのニッカーボッカーをはいた小さな黒人の男の子 Chicken Little が入って来る。

Sula は彼を自分の手で支えたり声で励ましながら、二人はこれ以上登れないという高さまでブナの木を登る。地面に降りると、Sula は Chicken の両手をつかんでひっぱり上げ、彼の体をぐるぐる振り回す。高い所まで初めて登った Chicken は大得意であり、また、自分の体が Sula の手からすり抜け宙に浮かんで川の水面へ落ちていく時でさえ、笑い声を立てている。J. Brooks Bouson は、Hannah の言葉で Sula が覚えた恥辱感と Chicken の死を結び付けて、“The death of Chicken Little also encodes a common response to the sudden exposure of one’s shame: the wish to die”（Bouson 64）と指摘している。Chickenの参入で再び不安定な気持ちになった Sula の中で、恥辱感がよみがえり、彼女は大胆な行為に興ずることでそれを掻き消そうとしたのだと考えられる。Chicken

は、Sula の中の、無意識的にこの世から掻き消してしまいたいと思っている自分自身であると捉えられる。Nel が目の前で展開する光景をじっと見ながらゾクゾクしていたのは、Chicken が親友 Sula との間に割って入って来た邪魔者だったからだと考えられる。それぞれの思いに温度差はあるが、Chicken の死に関して、Sula は Nel と共犯関係を結んだのだと思っていると捉えられる。

Ⅱ

Nel と Jude Greene との結婚は、Jude が抱える男としての劣等感と関わっている。黒人男性は、白人男性によって、比喩的な意味で去勢された存在なのである。Medallion の町を通って川に至る道路を建設し、更に Medallion と対岸の町 Porter's Landing をつなぐために橋の建設も予定されている。Jude はホテルのウェイターとしての仕事に飽き足らず、道路建設に従事することが、自分のように若く体力のある男がやるにふさわしい "real work"（81）だと思っている。全身を使って働き、日々の仕事をやり終えた夕方には、達成感、生の充実感が得られる仕事だと思っている。しかし、労働者として雇われるのは、貧乏白人であろうと、腕が細かろうと、移民であろうと、白人であり、黒人は排除されていると考えざるを得ない。そういう情況に怒りを覚えた Jude は、"man's role"（82）を果したい、大人であることを世間の人々に認めてもらいたいと考え、結婚しようという思いに至る。自分を支えてくれて、そのお返しに自分が彼女を保護し愛することで、"one Jude"（83）が生れるのだと彼は思っている。夫／妻というヒエラルキーのある結婚生活を思い描き、男としての勝負の場所である仕事から得られない男性らしい感覚を、男としての自信をそこから引き出そうとしているのが分る。結婚を自分が成し遂げた征服であると思わせてくれるような女性として、Jude は Nel を選び、二人は、それぞれが、異性愛中心の家父長制社会が割り振ったジェンダー役割を果す結婚生活に入っていく。

一方、Nel の結婚を見届けた Sula は、ボトムの外の、人種差別や性差別という人生の荒波が待っていると予想される世界へ旅立って行く。黒人であり、女であるが故の限界を越えたいという思いを持っている Sula の、大胆な、勇気ある行動である。彼女が大学教育を受けるのも、新たな自分を創りたいという願望の表われと捉えられる。

Nel にとって Sula は後景へと退き、Jude が一番大切な人となる。一方、Sula

は Nel のような、対等な立場で親愛の情を互いに対して抱き心の通い合う人を、異性に求める。そういう意味では、Sula は未だに Nel に執着し、自分の心にぽっかりとできた空間を埋めてくれる Nel の身代りを捜し求めていると考えられる。Sula は、体は “rippled with sex”（42）である Hannah が、午後の情事をした後はする前よりも幸福そうに見えるのを目撃して、セックスは “pleasant and frequent”（44）と思っているのであり、性的に放縦な面は、母親譲りと指摘することもできる。しかし、Sula にとってセックスは、「友」を見つけるための手段、彼女のことを理解してくれる “the other half of her equation”（121）を見つけるための実験なのである：“She had been looking all along for a friend, and it took her a while to discover that a lover was not a comrade and could never be—for a woman”（121）。Hannah の言葉が Sula を傷つけ、“there was no other that you could count on”（118-119）ということを Sula に教えた。また、Chicken Little の不在の重みを、手に残った彼の指の圧力を通して実感している Sula は、彼の水死に対し良心の苛責を覚えていると考えられる。しかし、そのことで責められることもなく、彼女の責任に対する感情は追い払われてしまった。それは彼女に“there was no self to count on”（119）ということを教えた。こうして “She had no center, no speck around which to grow”（119）となり、その時の感情、気まぐれに従って振舞うことしかできないが故に、ボトムの住民にすら、Sula は性的に放縦な女としか映らないのである。

恋人は親友にはなり得ないということを発見していても、悪魔と見做されていると分っていても、故郷でも “experimental life”（118）を送る。しかし、やがて黒人男性 Ajax に Sula は、心の絆が結べる可能性を見出す。彼は飛行機のパイロットになって空を飛び青い “deep sky”（126）に抱かれることに憧れている。彼とは “genuine conversations”（127）をすることができるのである。Ajax は Sula を見下した話し方もしないし、自分の行動の独言で満足したりしない。Sula から才気を期待しているように思えるので、彼女はそれを発揮する。自分が話すよりも彼は聞き役になることを好むが、自分の苦境をのんびりと話すこともある。彼女を甘やかしたり保護しようとする態度は取らない。彼女はタフで賢いと彼は思っている。Ajax は、心が広く寛大で、たまにしか爆発しないので復讐心を彼女に起こさせることもめったにない。従って、Ajax は、彼女を自分より劣っていて弱いから自分が守ってやるんだという態度ではなく、彼女と対等の立場で会話をし、彼女の心の声にも耳を傾けるのである。

彼はセックスをする時は、彼女が自分の上に乗るのを好み、そうすれば彼女が自分の上にそそり立つのが見え、やさしく卑猥な言葉を彼女の顔に投げつけることができるのである。征服の姿勢は好まず、セックスの卑猥性をも彼女と共有して楽しもうとするのである。この時の彼女は “Georgia pine”（129）に喩えられているが、ジョージア松は、長いものだと130m もの高さにまで育つ立派な松である。Ajax は Sula が今まで関係を持った男達とは全く異なるのである。John N. Duvall は、Sula がまるで彫刻家になったかのような声を聞き取っている（Duvall 61）。黒い色の下には金色の肌があり、それを削ると “alabaster”（130）があり、それをのみかタップハンマーでたたくと肥沃なローム層が現れ、その土の中に手を突っ込むとその下の “dewy chill”（131）が感じられるであろうと Sula は想像している。そして、そのローム層を湿らせておくのには、どれくらい自分の水が必要なのかしらと思っている。Sula の Ajax という男の本質を知りたいという思いが反映されていると捉えられる。ここで、Ajax を土、自身を水と喩えていることに注意したい。古代の人々にとって、土と水は、火、空気とともに宇宙を構成する基本的四元素であった（Jennings 26）。家父長制以前の、太古の時代の男女の交わり、心身ともに一体化し、解放感を味わうとともに生の充足感の得られるおおらかなセックスのイメージが重ねられていると感じられる。[3]

Ⅲ

Sula は実験的生を通して、心の絆が結べる相手でなければ自分は女として機能できないことを学んだのだと考えられる。一方、Jude に棄てられた Nel は、“now her thighs were truly empty and dead”（110）であり、自分には唯 “brain raveling away”（111）があるだけだと思っている。Jude と自分の親友の Sula が性的関係を持ったことで、自分は裏切られただけでなく、Jude に子供と共に棄てられたことで、Nel は心が打ち砕かれた思いなのである。そして、良き妻、良き母になるように育てられ、両方の役割を立派にこなしてきた彼女は、これからの自分の生は、母として生きるだけのものだと予想できるだけに、女としての生を奪われたような思いなのだと感じられる。病気の Sulaを見舞った時に彼女の裏切りをせめて Nel が言う “They worth keeping, Sula”（143）には、Nel の結婚観、男性観が窺える。男は経済的に養ってくれ、保護してくれるだけでなく、性生活を通して性的欲求も満たしてくれるから引き留めておく価値

があるという考え方である。Nel が本当に Jude を愛しているのなら、傷ついていても、彼を引き留める努力をしたのではないだろうか。従って、Sula の “I sure did live in this world”（143）、“Yes. But my lonely is *mine*. Now your lonely is somebody else’s. Made by somebody else and handed to you. Ain’t that something? A secondhand lonely.”（143）という言葉は、Jude との関係において常に受動的、従属的であった Nel の生き方と、自身の生に対し常に前向きで、挑戦的でさえあった Sula の生き方の対照を浮き上がらせる。

Eva は自分の元にやって来る男達の眼を意識して、女として魅力的でありたかったのだと思われる。一本しかない脚にストッキングと足首のずっと上まである “black laced-up shoe”（31）を常に覆いていた。自分が女であることを意識し、大切にしていたのである。母性の権化のような Eva の中にもセクシュアリティが息づいていたのである。一方、Nel は、貞淑な妻であるために、夫以外の男を決して見ないようにしてきた。異性を見て視覚の喜びを得ることさえ自ら禁じてきたのである。それは家父長制社会の性道徳による要求であり、Nel はそれを内面化してしまっていたのである。何年も経つうちに自分の心のまわりに “a steady gray web”（95）を織り出していたのである。性に関する厳しい道徳観が心をおおってクモの巣のようになり、彼女の心は自然な性的感情の発露を止められたのである。「見る」ことで夫以外の男性にときめくことは、自らの性的堕落につながる可能性を孕んでいる。従って、見ることを禁ずることでその可能性の芽を摘み取ったのだと考えられる。Nel は自身のセクシュアリティを自ら抑圧し、夫との関係にのみ制限してきたのである。

Jude が去った後、Nel はいつも「灰色の毛玉」（“A gray ball”〔109〕）が自分の近くを漂っているのを感じ、それを見ないようにしている。それは、彼女の中で、自分の股を、空っぽの空間を男性に満たして欲しいという性的欲望が動めていることを物語っている。

Ⅳ

Nel は 3 年経っても未だに Sula に対する怒りと女としての恥辱感を抱いている。しかし、それでも病気で伏している Sula を見舞う。彼女のバックにお金が全くないのを見ても質問するのを思い止まり、Sula が今必要としている薬を買って来る。Nel は Sula に、なぜ Jude と関係を持ったのかと詰問しながら、本音をぶつけていく。一方、Sula も自身の本心を明かしている。Nel が去った

後、通りを歩いている Nel を想像しながら、Sula は自分がどれだけ彼女に対して苦痛を与えたかを考え、Nel は “never remember the days when we were two throats and one eye and we had no price”（147）と思っている。アイスクリームを食べながら、同じ見方でいろんな人や物を見、代償など何も求めなかった少女時代の Nel との親密感、自分達の純真さを、今でも Sula は体で記憶しているかのようである。Eva が寝ていた部屋の Eva のベッドに横たわって、息を引き取りながら、Sula は “Well, I'll be damned”（149）、“it didn't even hurt. Wait'll I tell Nel”（149）と思っており、最後に心に浮かぶのも Nel である。Hannah の体に火がついているのに自分は唯ゾクゾクしながら見つめていただけだったこと、怒りと反抗心から Eva を老人ホームに入れたこと、Jude と関係を持ったことを Sula は悔いていると考えられる。Sula が嘘をついたのは生涯において一度だけであり、それは、Nel に対して、Eva を老人ホームに入れた理由についてである。黒人は年老いた家族を老人ホームに入れることにとても悩み、よその老人が一人ぼっちになれば立ち寄って床を洗ったり料理をするのが当たり前のボトムにおいて、Sula は Nel にだけは軽蔑されたくなかったのである。[4]

老人ホームを訪れた Nel は、Eva から、Chicken Little の死に関して、唯じっと見つめているだけでも罪がある、Sula と同罪だと指摘され、“Who would know that better than you?”（169）と責められる。焼死しようとしている Hannah を身を以て救おうとした Eva の言葉は重い。少年が水に呑み込まれていった光景を思い出しながら、自分はじっと見ていた（*“watched”*〔170〕）だけでなく、Chicken の手がすべって Sula の手から離れた時には「快感」（“good feeling”〔170〕）さえ覚え、Chicken が水の中に消えた時は、Sula は混乱して泣いていたのに、自分は落ち着いていたことを思い出す。自身の欺瞞性、罪を認めざるを得ない。Nel は、Sula に対して優越感を抱きさえしていたことを悟るのだと思われる。従って、Sula の自分への最後の言葉となった “About who was good. How do you know it was you?”（146）、“I mean maybe it wasn't you. Maybe It was me”（146）は、一つの真実を言い当てていると Nel は感じていると捉えられる。

少女の頃、Sula と一緒に遊んだ空間にもあった木々や微風が与える心地好い感覚を思い出しながら、自然に “Sula?”（174）と、まるで彼女がそこにいて呼びかけるかのように Nel の心の中から声が出ている。Sula との間にあった親密感が体で実感するかのように蘇り、親友 Sula を失った喪失感と悲しみが言葉

となって発せられたのである：“We was girls together” . . . “O Lord, Sula,” . . . “girl, girl, girlgirlgirl”（174）。Sula は、友情も愛も見返りを求めないものだということを、身を以て彼女に教えてくれたのである。

従って、物語の結末部において、女同士の友情が前景化されている。Madhu Dubey はこの結末に関し、

> The feminine pair of Nel and Sula unbalances, even as it cannot fully dismantle, the hierarchical gender opposition of black nationalist as well as white U.S. middle class ideology.（Dubey 71）

と指摘している。この “the hierarchical gender opposition” は、セクシュアリティの問題とも関わっている。従って、本作品の結末部においてジェンダー役割やセクシュリティの問題が後景化される形になっていると考えることができる。

本作品の最初に置かれたタイトルのない章は、ボトムという小世界の起源を語る神話として機能している（Bouson 49）。白人が谷間に住み、黒人が岡に住むという逆転した世界が生まれたのは、ある善良な白人農夫の言葉を信じた黒人奴隷が難しい仕事をやり終えて、約束通り自由な身分にしてもらった。しかし、もう一つの約束に関しては、白人農夫は谷間の肥沃な土地をやるのが惜しくなって、岡を「天の最低部」（“the bottom of heaven”〔5〕）と言いくるめて黒人奴隷に与えたからというものである。しかし、黒人達は、白人の欲深さ、狡猾さと、たぶらかされる自分達黒人の愚かさ、純真さを暗示する話を “A nigger joke”（4）として捉え、耐えて生きてきたのである。農地には適さず、冬には風が強く吹き、貧しさを強いられる土地であるからこそ、目に涙を浮かべながらも、ふざけて、“adult pain”（4）の籠った笑いで笑いとばしながら、肩寄せ合い助け合いながら生きてきたのである。語り手が、“In their world, aberrations were as much a part of nature as grace”（118）と語るように、自分達の伝統や習慣からの逸脱でさえ自然の一部として彼らは捉え、追放したり、根絶しようとはしないのである。悪と共存し、それらに耐え生き延びるというのが、彼らの先祖から受け継いできた生き方なのである。だから、悪魔にしか見えない Sula を反面教師とすることもできたのである。[5] しかし、期待していたのに黒人は労働者として雇われず、白人の作ったものは地上から消してしまいたいという二項対立的考え方に、彼等は陥って、トンネルを壊す。トンネル

の中に、太陽で溶けた雪が洪水となって流れ込んで、多くの住民が水死する。[6] 今や岡には、頑固者、老人、金持ちの白人が点在して暮らすのみである。多くの黒人の若者の感情で息づき胎動していたという感覚は、最早ない。

「産む生／性」、「産まない生／性」を選ぶにしろ、極端に自らを妻としての役割、母としての役割に束縛せず、心に柔軟性を保ち、自分達は天から土地を間借りしている小さな存在にすぎないことを弁えて生の営みをしているのであれば、不均衡であろうと、異性愛と女同士の友情が共存し得る空間はあることを、本作品は語りかけていると考えられる。

Nel は自分自身でありたいと願いながらも、女の伝統的生き方に従うのが良いという価値観を内面化していく一方で、上記の願望を抑圧していったと考えられる。従って、Sula は Nel の中の無意識の黒い影の部分と捉えることもできる。まぶしく輝きながら自由に飛び回る揚羽蝶のような、一見モダン・ガールのイメージが Sula には重ねられている。しかし、Sula は充足感の得られる生を探求していくのである。故に、Sula と、自己探求をあきらめた Nel は、二人でひとりの人間、ひとりの女性の裏と表と捉えられる。

Notes

1．Houston A. Baker, JR は、Sula と Nel は互いにとって母親役をしていると指摘している（Baker 106）。二人とも自分の母親との間に精神的距離感を少なくとも抱いていることが推察される。

2．J. Brooks Bouson は “gal” という言葉は、“racially derogatory expression of contempt” であると指摘している（Bouson 54）。

3．Morrison は、Ajax と Sula のセックスシーンに関しては、子供の泥んこ遊びのイメージを重ねたと語っている（Koenen 76）。

4．Wilfred D. Samuels と Clenora Hudson-Weems は、ボトムの黒人にとって、自分の年老いた家族を老人ホームに入れることは “unpardonable sin” であると指摘している（Samuels 35）。

5．ボトムのキリスト教徒である黒人達は、God には四つの顔があると信じている（118）。Allen Alexander は、このことに関し次のように述べている。

In Morrison’s fictional world, God’s characteristics are not limited to those

> represented by the traditional Western notion of the Trinity: Father, Son, and Holy Ghost. Instead, God possesses a fourth face, one that is an explanation for all those things—the existence of evil, the suffering of the innocent and the just—that seems so inexplicable in the face of a religious [Christian] tradition that preaches the omnipotence of a benevolent God.（Alexander 293）

また La Vinea Delois Jennings は、次のように述べている。

> The recognition of a fourth face or evil dimension of God by Sula's neighbors alludes to African traditional thought rooted in the fusion of opposites: the stabilizing balance of the fusion of the four fundamental constituents of the universe: earth, water, fire, and air and the stabilizing balance of the fusion of good and evil.（Jennings 26）

四という数字は、精神的安定感、バランス感覚を与えるという意味で、本作品において重要であると考えられる。

6．白人に対する怒り、敵意を行動で表現する瞬間のボトムの黒人達は、1960年代後半に本格的に現われる急進的な黒人解放運動家 "black nationalist" を思わせる。彼等の陥った二項対立的考え方、破壊行為は、男性原理優先の考え方と通底する。1930年代に活動したブラック・ムスリムは、既にこういう考え方を抱いている。

Works Cited and Consulted

Alexander, Allen. "The Fourth Face: The Image of God in Toni Morrison's *The Bluest Eye*." *African American Review*. 32.2.（1998）.

Baker, JR, Houston A. "Knowing Our Place: Psychoanalysis and *Sula*." *Toni Morrison*. Ed. Linden Peach. New York: St Martin's P, 1998. 103-109.

Bouson, J. Brooks. "I Like My Own Dirt." *Quite As It's Kept*. New York: State U of New York P, 2000. 47-73.

Dubey, Madhu. "No Bottom and No Top." *Black Women Novelists and the Nationalist Aesthetic*. Bloomingtom and Indianapolis: Indiana UP, 1975. 57-71

Duvall, John N. “Engendering Sexual/ Textual Identity: *Sula* and the Artistic Gaze.” *The Identifying Fictions of Toni Morrison*. New York: Palgrave, 2000. 47-69.

Furman, Jan. “Black Girlhood and Black Womanhood.” *Toni Morrison's Fiction*. Columbia: U of South Carolina P, 1996. 12-33.

Grewal, Gurleen. “Freedom's Absent Horizon: *Sula*.” *Circles of Sorrow, Lines of Struggle*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998. 42-59.

Guerrero, Ed. “Tracking ‘The Look’ in the Novels of Toni Morrison.” *Toni Morrison's Fiction: Contemporary Criticism*. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1997. 27-41.

Jennings, La Vinia Delois. *Toni Morrison and the Idea of Africa*. Cambridge: Cambridge UP. 2008.

Koenen, Anne. “The One out of Sequence.” *Conversations with Toni Morrison*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 67-92.

Morrison, Toni. *Sula*. New York: Alfred A. Knopf. 1973.（本作品からの引用は、本文中で括弧内で頁数のみを示す）

Samuels, Wilfred D., and Clenora Hudson-Weems. “Experimental Lives: Meaning and Self in *Sula*.” *Toni Morrison*. New York: Twayne Publishers, 1990. 31-52.

Tate, Claudia. “Toni Morrison.” *Conversations with Toni Morrison*. Jackson: UP of Mississippi. 156-170.

蟹江弘子「黒人女性の Sexuality—*Sula* をめぐって」『南山英文学』第24号（2000年）55-68頁。

川村邦光編『セクシュアリティの表象と身体』京都：臨川書店，2009年

西山恵美「「ボトム」に生きたアメリカ黒人の死生観」『愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要』第 8 号（2005年）1-25頁。

利根川真紀「Shadrack のシェルショック—*Sula* 再考」『アメリカ文学研究』第38号（2001年）135-149頁。